

参 考 資 料

土木學會誌 第十八卷第二號 昭和七年二月

濠洲印度兩首都建設新都市計畫

(Canberra 及び New Delhi)

(本文は E. N. R. 誌 Dec. 4, 1930 及び Sept. 10, 1931 に報告せられたるものである)。

新首都計畫及び建設

1930 年前後は都市計畫上注目すべき 2 個の新首都建設が完成した意義深い時である。乃ち一は濠洲、他は印度共に英國の殖民地、前者は自治聯邦、後者は帝國として總督の治下にあり。その首都は共に世界的商港都市であるが久しく適當なる新首都の位置 (location and site) 撰定に意を用ひてゐた。濠洲は米國に於ける Washington の location の如く現首都 Sydney の南方約 100 哩を距てた全くの原野に地を選び、1911 年 1 月 Canberra の總面積 900 方哩、之れに配するに聯邦商港 (federal port) として Jervis Bay に於ける 2 方哩を聯邦の直管地と決定し、正式に新首都建設を決定した (附圖第一)。然るに大戰の打撃を受け財政上建設費を遙かに減額して 1921 年起工し、1927 年公共建築物のみ未完成の儘一應竣工を告げ同年聯邦議會を此の地に開き公式に首都となり現在の人口も Canberra 市内 6000, Jervis Bay 400, 全區域 8500 を數ふるに至つた。一方印度は現首都 Calcutta が東岸に偏して統治に支障を生ずると、氣温高くして夏期は半公式的に Simla の高原都市に轉都するを常例とする缺點を有するが爲、約 20 數年前 Calcutta の西北 850 哩を距る近代的大都市 Delhi の南郊に地を卜し、工費 50000000 圓 5 箇年計畫として 1911 年 12 月起工式を擧げた。然し乍ら同じく大戰の影響を受けて數年間工事を延期し後工費を倍加して前後 18 年を費し 1931 年未だ全くとは云ひ難いが、兎も角主要建設物の竣工を告ぐるに至つた。

Location Canberra は國の西南端にあつて各州 (state) 首都との距離近きは 204 哩より遠きは約 2000 哩にも及び、而して一の鐵道を除いては全くの原野 (open country) なりしに反し、New Delhi は全印度の中央に位し既に交通の中心をなす既存大都市の南郊に隣接する (附圖第三)。

Site Canberra は Molonglo 河の節點たる湖水を挟み、New Delhi は Jamna 河に接して共に緩丘地をなし、排水を良くする。その海面上の高度及び氣温を示せば次の通り。

	氣 温	高 度
Canberra	68°F (夏期平均)~42°F (冬期平均)	1900 尺

New Delhi	{ 110°F (低温度) 90°F (飽和温度)~40°F (乾燥)	750 尺
-----------	--	-------

街路網 Canberra は公館、商業、住居等數個の地域毎に中心を設け、就中公館中心を主中心とし他を副中心 (subcenter) として各中心毎に路線を放射せしめ之れに夫々環狀線を配し、各中心間を結ぶ路線を主要幹線としてゐる(附圖第二)。New Delhi は舊 Delhi 市を商業地域とする爲、新區域は總督官邸の表通りをなす壯大なる公館街 (King's Way) を中心としその前端 War Memorial 及び中央停車場前兩廣場を交通中心として diagonal system を採用してゐる(附圖第四)。何れも主要なる街路交叉點は交通環 (traffic circle) として近代自動車交通の自由なる循環 (traffic circulation) を得しめてゐる。

街路の幅員は何れも公園道型を採用し、Canberra では

	全幅 (尺)	車道 (尺)	歩道 (尺)	綠樹帶 (尺)
(1)	200	30×2	20×2	100
(2)	100	30	20	50
(3)	60	20	12	28

亦 New Delhi では附圖第五に示す4種の標準型に従ひ幹線 50 哩、補助線 30 哩皆完成してゐる。

舗装 Canberra では (1) tar 及び bitumen 處理 macadam, (2) hot-mix 及び penetration 工法 bituminous macadam, (3) concrete, (4) gravel の4種、New Delhi は主として macadam 幹線のみ bituminous coating を施してゐる。

下水 下水施設は兩者共に意を用ひ、Canberra では幹線 10 哩、枝線 45 哩、處分設備等既に完成し、New Delhi では新舊兩都市共通とし下水管の外處分場 1 600 acres、ポンプ設備 24 000 000 gal/day を完成してゐるが兩者共未だ充分の機能を發揮するに至らない。

給水 Canberra では水源を市の上流 15 哩の Cotter 河に取り dam の高さ 60 尺、貯水容量 380 m.g. の貯水池を設けた。將來は dam の高さを 100 尺に増して 1 400 m.g. の貯水能力を得しむる計畫に立脚した。給水は gravity supply system も計畫されたが人口 50・000 迄は pump 給水が遙かに經濟的なりと決定された次第である。New Delhi では水源を 1/4 哩上流の Jamna 河にとり新舊兩市共通施設とし在來の slow sand filter は有效ならずとして Paterson type の filter を採用、下水放流用及び路面撒水用水は原水給水とした。

建設首腦部の組織

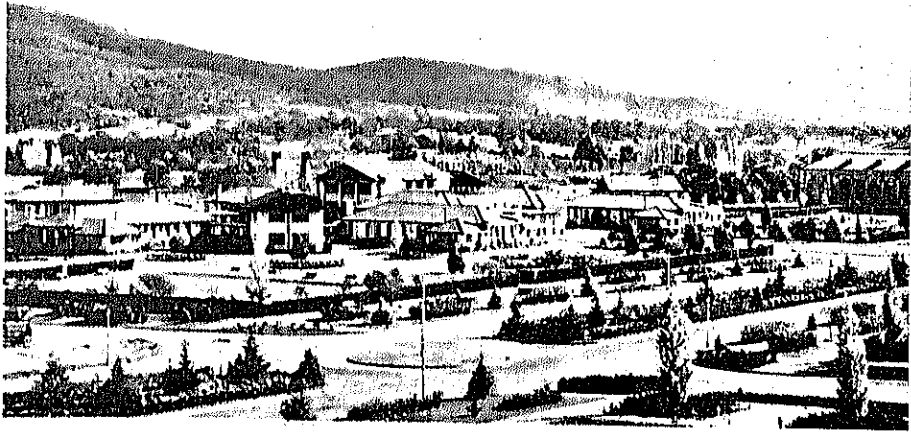
Canberra は 1911 年聯邦政府にて起工し、1921 年顧問委員會を設けたが 1925 年組織を變へて聯邦首都執行委員會 (Federal Capital Commission) を設けて各種行政及び首都建設

事業一切を行はしめてゐる。委員の一人は Canberra 市民の代表である。執行委員會の技師長は W. E. Potts である。

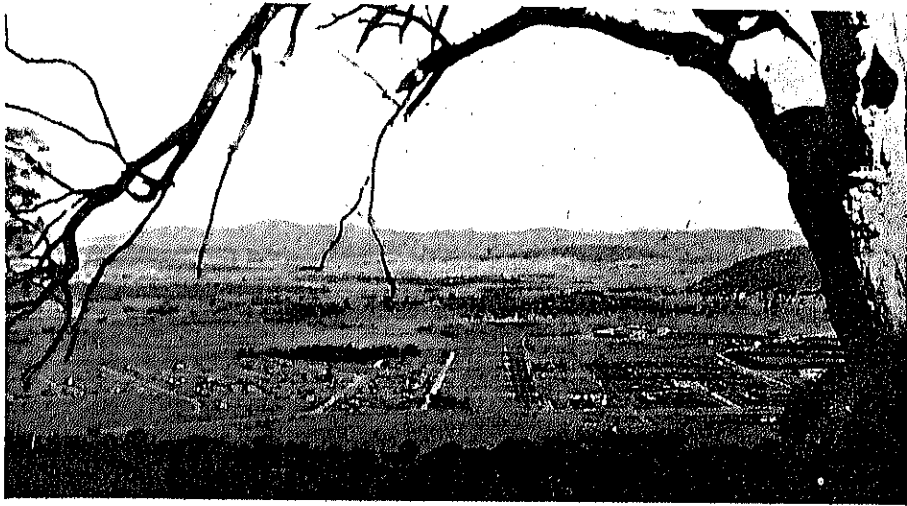
Now Delhi では計畫及び事業共印度政府の任命にかゝる委員會 (Committee) の指揮 (General Direction) に置く。委員長は政府の土木相で委員は土木相の外財務、土木兩次長 (secretary), Delhi 市執行委員長及び技師長の5名である。Delhi 市執行委員長は重要事項を除いては事務を専行し、技術に關する事項は技師長 (前 Sir Hugh Keeling 現 Sir Alexander Rouso) が主席建築師に協議し政府を代表して之れを専行する。

(藤芳義男 抄譯)

写真第一 Canberra の代表的街路及び建築物

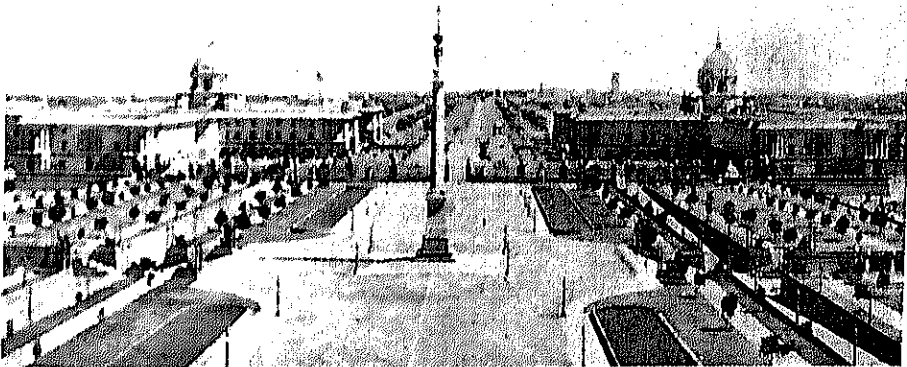


写真第二 Canberra



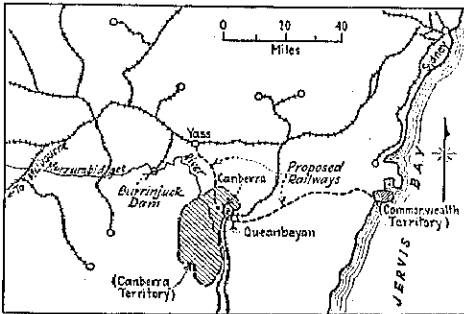
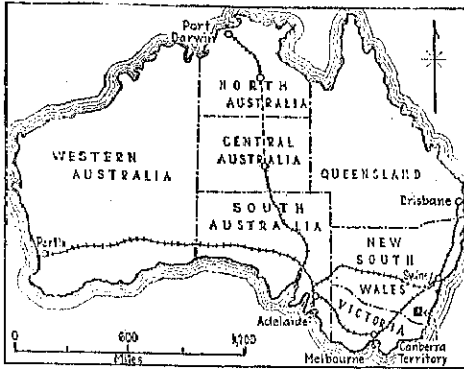
中央の圓は Capital site, その右は議事堂, 前面は住宅地城

写真第三 New Delhi に於ける總督官邸より King's Way を望む中心街

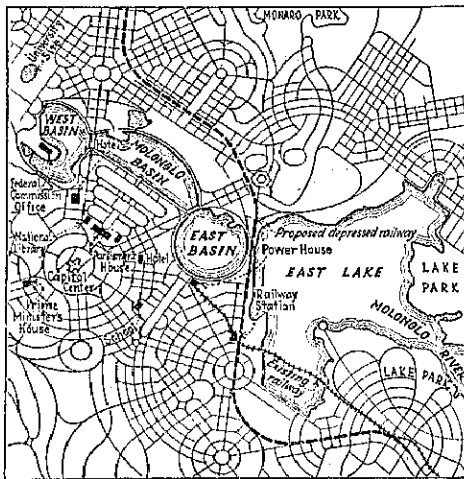


(土木學會誌第十八卷第一二號刊)

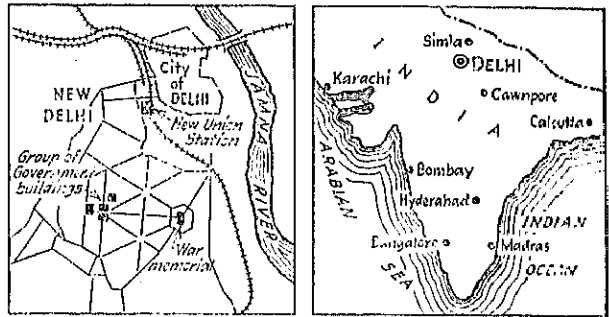
附圖第一 濠洲に於ける聯邦直管區域



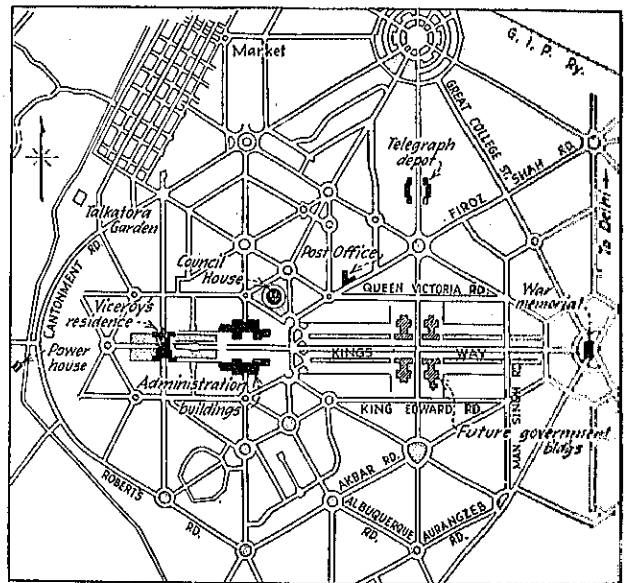
附圖第二 Canberra 首都計畫の中央部



附圖第三 印度新首都 New Delhi の位置



附圖第四 New Delhi 新都市平面圖



附圖第五 New Delhi 市街路標準型

